説教20220403ヨハネ11：17-44「彼らに信じさせるため」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今日の聖書箇所でイエス様は、心に憤りを覚え、涙を流されるというめったにないことを成されます。心に憤りを覚える、という事は私たちにとってはあまり良い精神状態ではなく、なにか止むに止まれない心の葛藤が表に現れているのです。私たちはできれば憤ることなく日々を過ごしたいですし、イエス様も私たちがそうなるように望んでおられるのです。ところが、今日はイエス様ご自身が、心に憤りを覚えられました。イエス様は私たちに対して何かを示すためにそうせざるを得なかったのでしょう。イエス様が私たちに対して憤りの表情を顕されたのはなぜなのかを考えて参りたいと思います。

私が神学校で学んでいたとき、牧師はお葬式でいくら悲しくても泣いてはいけませんよ、と、或る教授から言われました。愛し合っていた兄弟姉妹が天に召されることは、別れのときでもあり、別れの辛さや哀しみが感極まって多くの涙が流されます。そうして涙が流されることで、やがてそこに癒しのときが与えられ、私たちは死んでも、生きるという復活の希望に生かされるのですが、牧師は常に防波堤になって、人々が悲しみに押し流されないように守りなさいという事なのでしょう。

ところが今日、イエス様は涙を流されました。イエス様は周りの人にわざわざ自分の悲しみを示すように涙を流されたのです。それは、イエス様がラザロ、マリア、マルタという兄弟の家族と非常に親しくしており、親しい感情の交わりがあったからです。人間としてのイエス様は、血縁によるのでなく、信じる人たちと共にこの地上を歩まれました。ラザロ、マリア、マルタという兄弟はイエス様のことをメシアであると固く信じていました。マルタは「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」とイエス様に言っています。この様に証しするマルタはイエス様と固い絆で結ばれ、二人は信仰によって、親しい間柄となったのでした。でも、その時の周りの状況を見てみますと、先週説教しましたように、ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのでした（9：22）。この様な状況下で、信仰によって結ばれた二人の信頼と情愛は、いやが上にも高まったに違いありません。

この兄弟たちが暮らしたベタニアというところを見てみましょう。ベタニアはエルサレムの町から２,３キロ離れた、郊外の小さな街であります。当時、イエス様をメシアだと信じる人たちは、だんだんとエルサレムの中心地には居づらくなって、ベタニアのような郊外の街々に追い出されていったのではないでしょうか。先週の、目が開かれて、イエス様を信じた人が、外に追い出された、その先というのはベタニアのような郊外の町であったのでしょう。その郊外の町で、人々はイエス様と出会い、イエス様を信じて、イエス様と親しい間柄になったのであります。

この様に黙想していきますと、ラザロ、マリア、マルタそしてイエス様の信仰に基づいた親しさというのは、イエス様と一緒にいて喜び祝う間柄であることはさることながら、それは常にイエス様を信じていない人々からの攻撃にさらされているがゆえに高まったという側面もあるでしょう。

マルタは家に帰ってからマリアに「先生がいらして、あなたをお呼びです」と、耳打ちをします。それは、家に弔問に訪れていた多くのユダヤ人たちに聞かれないようにするためでした。弔問に来たユダヤ人たちのイエス様に対する思いは様々だったことでしょう。この時、イエス様は既に有名でありましたから、ユダヤ人たちはイエス様にお会いして奇跡の業にあやかりたいと思っていたでしょうか、或いは、迫害を恐れて最初から警戒の目で見ていたでしょうか。彼らのイエス様に対する思いは本当に人それぞれであったことでしょう。

それでマリアはそのような多くのユダヤ人と共にイエス様とお会いすることになるのですが、33節「イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、」と記されています。マリアとユダヤ人たちは皆泣いていたのでした。ここで泣いている人たちの、その涙の動機は様々でしょう。ラザロとそれほど親しくなかった人でも、こういう弔問の場では周りの雰囲気にのまれてしまって、本当に悲しい感情に襲われて大粒の涙を流すという事もよくあることです。イエス様はこの様に多くの人たちが泣いているのを前にして、心に憤りを覚え、興奮されたのです。もし仮にこの場に来たのがマリア一人ならば、マリアとイエス様は手に手を取り合って、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかったでしょうに」と涙するマリアをイエス様は慰めることが出来たでしょうが、そこにはほかにも多くの人が居合わせたのです。ここでイエス様は、この群衆たちに言い聞かせる言葉を持ち合わせていなかったのではないでしょうか。

ここでイエス様は珍しく人々に取り乱した姿をあらわにされます。イエス様はここでいくら言葉を並べても、群衆たちが自分を信じるようにはならないという事を知っていました。ですからイエス様は言葉の代わりに、心と体と感情を用いて示されたのです。

今回、或る注解書を読んでいますと次のように記されていました。「私達は、言葉によって隣人にキリストを勧めるのではなくて、体や態度でもってキリストを証ししていく」という事でした。このことは、言葉によるキリストの証しを否定するものではありませんが、言葉が行き詰った時、その言葉の源である心と体そのものがキリストを自ずと証しするという事でしょう。

イエス様は御言葉そのものでありながら、体をとって肉となってこの地上に来て下さいました。そのイエス様が今回、御自分の体と心を十分に人々の前に示されて、御自身の言葉を示されたのだといえましょう。

それでイエス様の言葉にならない言葉というのは、憤りであり、興奮であり、涙を流されることでした。そんなイエス様を見たユダヤ人たちたちは様々に言い合います。「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかったのか」

イエス様はこんな風に言い合うユダヤ人たちが、実のところイエス様を信じていないという事を知っていました。ですからイエス様は38節、「再び心に憤りを覚えて、墓に来られました。」

これからイエス様は私たちにラザロを生き返らせる業を示されます。憤り、興奮し、涙を流すという態度を示されたイエス様は次に、生き返ったラザロの体を、皆の前に示すことによって、ますます皆に、イエス様のことを信じさせるためでした。

一体、信じてもらえないという事は、私たち一般の人間にとっても、とてもつらいことであります。時には信じてもらえないことで、生きていくことに絶望してしまうほどであります。

イエス様も同様の辛さを天の父なる神に対して告白されています。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」

イエス様はこの様に、自分の辛さや、迫害するユダヤ人たちの脅威を十分に身に負いつつも、周りにいる群衆たちが、イエス様を信じてくれることをひたすら願いつつ、前へ進んで行かれるのです。

「ラザロ、出て来なさい」とイエス様は大声で叫ばれ、ラザロは生き返って墓から出て来ました。

さて、体のよみがえりを信じる私たち一人一人も、自分が考える時ではなくて、神様が与えられる時に、この様にイエス様からよばれて、体のよみがえりにあずかることになります。私たちはこのことを信じて最後まで歩んで行くのです。

ですからこの時ラザロはイエス様から特別の奇跡を与えられたという事ではなくて、この復活の奇跡は、イエス様を信じるものすべてがやがて預かる事になる奇跡なのであります。

それで、この時、ラザロが生き返ったということをマリア、マルタの家族たちは涙を流して喜んだでありましょうが、聖書の内容からすれば、その再会の喜びよりも、この出来事によってイエス様を信じる者と信じない者に分かれたという事の方が問題でした。ラザロをイエス様が生き返らせたというニュースは、たちまち全土に拡散され、イエス様を迫害する手の勢いは、最大にその勢いを増したのでありました。

私たちはこの様に、風雲急を告げる状況の中で、ラザロの生き返りの業が示されたことに思いを致したいと思います。十字架はまじかに迫っています。ラザロやマリアやマルタの家族も、これから安閑とはしておられないでしょう。イエス様と同じように、憤り、興奮し、涙を流す日々が続くかも知れません。しかしそのような中にあっても信仰者に対するイエス様の祝福と御守りは絶えることがありません。イエス様ご自身も、憤り、興奮し、涙を流される方であります。そうしてそのまま十字架につかれて、死なれましたが、復活の命に蘇られたのです。皆が信じるようになるためにラザロを復活されたイエス様の業をこの受難節に覚えながら、ますます私たちがイエス様を堅く信じて復活の命の道を歩んで行くことが出来ますようにと祈ります。

祈ります

天に居られる

御子は今日ラザロを復活させ、あなたを信じる者が皆復活し、体のよみがえりにあずかることを明らかにして下さいました。御子は信じられないことの悲しみによって、涙を流され、私たちが信じる者になることを切望されています。どうか私たちも同じ悲しみを懐きながら、御子のよみがえりを隣人に告げ知らせていくことが出来ますように。

御子のよみがえりの希望に生きる私たちが、全ての愛情を御子によって支えられ、憎しみや攻撃に至る情念から解放されます様に。戦争のさなかにある方、コロナ渦にあって孤独のうちにある方、肉体的精神的な攻撃にさらされ貧しくされ苦しんでおられる方々が、あなたを信じ、あなたの救いの御手にすがって、愛と希望を見出していくことが出来ますように。

私達が今、苦しんでおられる方を覚えて執り成し祈っていくことが出来ますように。又、出来る限りの業をその方々に対して行っていくことが出来ますように。

父と聖霊と共に